take a tour with intoxicate

HAWAII

ALOHA!

2012 July
Take Free

写真提供：ハワイ州観光局

TOWER RECORDS NO MUSIC, NO LIFE http://tower.jp/

COLUMN

take a tour with intoxicate ～ HAWAII

イントキシケイトが提案するハワイへのもうひとつの旅

この夏、ハワイを舞台にした映画が２本公開される。現在公開中の『ファミリー・ツリー』と、7月7日より公開される『プリンセス・カイウラニ』。この２本を観ると、ハワイの歴史に自然と興味が沸いてくる。そこで、もう一歩進んで、ハワイと日本の関係について興味を持った方に。こんなにも身近なところに、日本とハワイのつながりを知ることができる場所があるのです。まずは、自分の目で見て、耳で聴いて、確認してみてはいかがでしょう。そんな行動を起こすきっかけになればいいな、という特集です。

2006年映画『フラガール』完成→ 2011年３月11日。そして『がんばっぺ フラガール！』まで。

text : 藤崎真一

映画『フラガール』はこんな実話を映画化したものでした。1965年、日本最大規模の常磐炭鉱ではかつてない人員整理が始まっていました。石炭から石油にエネルギーの中心が移りゆく時代だったのです。そこで町興しとして始まったのが、町のハワイ化計画。潤沢に湧き出る温泉を利用した娯楽施設を核にした一大リゾートを作ろうという壮大な計画でした。雇用対策で始まった計画ななだけに、農業経験ある人は寒いこの地に椰子の木を植え根付かせ育てるなど、すべては地元の人で賄うことが命題。最大の売りであるフラダンス・ショーも同じ。フラの指導には当時最先端のフラを踊れる数少ないダンサーでもあったカレイナニ早川氏を招くものの、実際の踊り手は盆踊りしか踊ったことのない地元の女性。ここから始まるさまざまな困難を乗り越えながらも厳しいレッスンが実を結び、きちんとお金を取れる踊りを身につけたフラガールはいよいよ初日を迎え、大盛況のうちに幕を閉じる。この初日のステージシーンがハイライトでした。

フラガールのセンター役に蒼井優、先生役の松雪泰子に加え豊川悦司、富司純子、岸部一徳という面々を李相日監督が斬新な手法を駆使しながら見事な演出でまとめた、日本でしか作りえない日本映画史上に残る名作となりました。映画音楽をはじめて担当したジェイク・シマブクロのウクレレがまた良くて、画面にのびのびとした広がりと、ハワイ特有の爽やかな香りで花を添えました。

あれから５年、舞台となったいわき市を含む東北地方を大地震と津波がが襲ったわけです。『がんばっぺ フラガール！』は震災からスパリゾートハワイアンズ再開までの道のりと苦悩と頑張りを追ったドキュメンタリーだ。震災後途方にくれる彼ら。しかし、やがて施設を再開して生活を再スタートさせ、そしてまた観客の前で踊るという希望がわいてくる。まずできることをやる、被災地のために、自分達のために、そして大勢の、傷を負った誰かのために動き出したのです。それは開業前年に宣伝を兼ねて行った全国キャラバンを46年ぶりに復活させること。45年前、町を救うために「一山一家」というスローガンのもと動いたいわき炭鉱の人々。こんどは自分たちがいわきはもとより、全国を元気つけるという意気込みで「一国一家」の心で動き出したのです。この活動は多くのメディアで連日報道され、これを観ある人は再開したスパリゾートハワイアンズへ、ある人は身近な場所で募金するなど、一体彼らの行動がどれだけの効果を生んだことでしょう。すごい話だと思います。

『フラガール』
監督：李相日
音楽：ジェイク・シマブクロ
出演：松雪泰子／豊川悦司／蒼井優／他
[(株)ハピネット BIXJ-0010(BD) TBIBJ-7170（DVD）]

『フラガール メモリアルBOX』
[(株)ハピネット BIBJ-9220]
３枚組

『がんばっぺ フラガール！-フクシマに生きる。彼女たちのいま-』
[東映ビデオ（株） DSZD-08056] 7/21 発売

監督：小林正樹
音楽：ジェイク・シマブクロ
挿入曲：「First Step」ジェイク・シマブクロ（ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル）
主題歌：Rake
ナレーション：蒼井優
出演：スパリゾートハワイアンズ・ダンシングチーム／他

"A L O H A"という言葉の文字にはそれぞれ意味があるといいます。

A はアカハイ：親切、慎み
L はロカヒ：調和する
O はオルオル：思いやりと温和な態度
H はハアハア：謙虚である
A はアホヌイ：忍耐強さ

フラガールが今回とった行動はこうしたアロハの教えもあるのだろうか？多くの負の歴史を背負ったハワイの一番有名な言葉〈ALOHA〉。フラガール２作品をもう一度観てこの言葉の意味を確認してみようと思います。

写真提供：ハワイ州観光局

「家族のきずな」六世が誕生したハワイのビッグ・ファミリー

ローズ・フェスティバルの野菜山車

「呼び寄せ」と記されたパスポート

「移乗する丸」（二代目）の模型

「海外移住の歴史」のコーナー

「待望の移住地」（『写真集1964』より（彩色））

移動に持参した茶箱とスーツケース

「萬屋」（よろずや）

ハワイの火山岩で作られた石臼

さまざまな編物

COLUMN

ハワイと日本　移民の歴史

もう一歩興味の先に向かうために、足を運んでみよう。

text : 渡部晋也

岡晴夫の唄声で《憧れのハワイ航路》がヒットしたのが1948年。それをもとにして、美空ひばりを迎えた同名映画が封切られたのが1950年。ジェット機時代の前だから、客船で海を往く航路だった時代のことだ。それ以来ずっと、ハワイは人気の観光地として日本人に愛されてきた。しかしそこからさらに数十年さかのぼった19世紀後半に、ハワイと我が国の関わりは始まっていた。

それは人の移動によるもの。つまりは移民による関わりだ。明治維新で鎖国時代が終わり、日本人が外国の地を踏み始めた頃、それ以前にあったハワイ王朝からの依頼によって、非公式ながら最初の日本人移民がハワイの地を踏んでいる。その後、1885年には両国政府間で移民協約が結ばれる。この事業はおよそ10年ほど続き、3万人近くがハワイに渡ったが、その後も民間の移民会社などを通じて継続。そして排日移民法が施行される1924年まで、大きな夢を抱いておおぜいの人々が海を渡っていった。

こうした移民は当初交わした数年の契約が終わると稼ぎを持って帰国するものもいたが、それはほんの一握りで多くは帰るだけの金を得られずハワイの地に残らざるを得なかった。そして彼らが礎となり、ハワイの日系人社会が形成されることになる。もっとも第二次世界大戦中には敵国民として強制収容や立ち退きを求められるなどしたが、ハワイでは日系人が人口の4割近くを占めていたこともあり、アメリカ本土ほどひどい状況ではなかったという。またハワイ生まれの2世達は米国人としてアメリカ軍に志願。ヨーロッパ戦線で活躍した第100大隊や442連隊のように、日系人が中心の部隊も結成された。まさに波乱に満ちた世紀を体験してきたと言えるだろう。

さて、こうした日系人の活躍は、ハワイだけに限ったことではない。ハワイに続けて行われたアメリカ本土への移住。幕臣から明治政府に登用された榎本武揚が組織したメキシコ移民団。その後、ハワイ、アメリカ本土への移民が難しくなったため、代わって始まったブラジルへの移住等々、南北アメリカを中心に多くの日本人が新天地を求めて渡っていったが、その全てが夢に描いた生活を獲得できたわけではない。出国前に聞かされていたものとはあまりにもかけ離れた待遇や、想像以上に過酷な労働、熱帯の伝染病・マラリヤやその他の疫病による死者の続出、そして前述の戦時下における迫害など、様々な苦難が彼らを待ち受け、容赦なく襲いかかっていったのだ。

それほどの苦難に見舞われながらも、各地で日系社会と呼ばれるものが存続しているのはなぜか。それは日本人特有の勤勉さと、自身が犠牲となっても、子どもである二世には高い教育を受けさせようとした一世の教育熱心さがあったからに他ならない。さらに、こうした多くの移民達が積み上げた信頼が、日系人全体のステイタスをあげているとも言えるだろう。

横浜の新港地区にあるJICA横浜海外移住資料館ではハワイや北米、そしてブラジルを中心とした南米への移民に関する資料が集められ、海外移住の歴史からそれを支えた時代背景、そして実際に人々が使っていた農機具や日用品、娯楽品といった品物、さらには現在の日系社会の様子なども展示されている。さらに特別展として、7月27日から9月2日まで、ハワイの日系人に関する展示を開催。ここでは彼らの歴史を綴ったドキュメンタリー『100年の鼓動ーハワイに渡った福島太鼓』も上映される。

これらの展示を見ていると、明治維新以降現在に至るまでの日本の歴史の中で、移住者の往来がもう一つの重要なラインであることに気づかされる。音楽やダンス、様々な芸能といったものは、その時代背景を知ることでさらに理解が深まることがしばしばある。特に移民の集合体とも言える南北アメリカの音楽や芸能に興味があればなおさらだ。

話をハワイに戻そう。戦前の一時期は人口の過半数が日系人だった地域もあるくらいだから、様々な世界で活躍した人を多数輩出している。音楽だけでいえば日本のハワイアン・ミュージックの草分けである灰田勝彦に始まり、ウクレレの名手として名高いハーブ・オオタ（オータ・サン）。プレイヤーとしてだけでなく、プロデューサーとしても活躍するロイ・サクマ。そしてロイの教え子でも有り、若手のウクレレの名手として大人気のジェイク・シマブクロ。ハワイ独特のギター・スタイル、スラック・キー・ギター奏者のオジー・コタニなど、他にも沢山の日系アーチストが活躍している。アーチストだけではない。ハワイアンソングの定番には《ハセガワ・ゼネラル・ストア》という曲がある。これはマウイ島で1910年から営業している、広島出身のハセガワ兄弟が始めた店を歌ったもの。作者がこの店で品揃えに感動して作った曲だ。

さらに日系人が産んだハワイ民謡もある。さとうきび畑の労働歌として生まれた《ホレホレ節》は、つらい労働への嘆き、望郷の想い等が日本語だけでなく英語やハワイ語のタンゴも交えて歌い込まれている。またお盆の時期に催される盆踊りの習慣も持ち込まれ、《福島音頭》や《岩国音頭》といった歌が現在でも受け継がれている。

観光地としてのハワイではなく、知られざるもうひとつのハワイへ。苦境を乗り越えてきた先達に敬意を表しつつ、少し関心を深めてみてはどうだろう。

『うたの旅人』
v.a.（ホレホレ節収録）
[キングレコード KICS-1474]

『ウクレレ・レガシー』
Ohta-san（Herb Ohta）、Herb Ohta Jr.
[レイ・レコード LEIR-0117]
7/4 発売

『ウクレレ X』
ジェイク・シマブクロ
[Sony Music Japan International SICP-3290]

特別展示　ハワイに生きる日系人～受け継がれる日本の心～　同時上映：『100年の鼓動～ハワイに渡った福島太鼓』

会場：JICA横浜海外移住資料館［企画展示室］　横浜市中区新港２丁目３番１号（赤レンガ国際館）　http://www.jomm.jp
会期：2012年７月27日（金）～９月２日（日）
資料館開館時間：10:00～18:00（入館は17:30まで）　休館日：月曜日（月曜日が祝祭日の場合は翌日）　入館料：無料
「100年の鼓動」上映スケジュール　１回目：14:00～/2回目：16:00～ ※期間中開館日毎日上映（上映時間：57分）

EVENT INFORMATION　**ヨコハマにハワイがやってくる！　アロハヨコハマ 2012**
7/27日（金）、28日（土）10:00～21:00、29日（日）10:00～18:00　※会場により日程・時間が異なります。
会場：横浜港大さん橋国際客船ターミナル、ランドマークプラザ、横浜ベイクォーター、クイーンズスクエア横浜、コレットマーレ、横浜マリンタワー、横浜ワールドポーターズ　http://www.aloha-yokohama.com

COLUMN

楽園ハワイの音に魅せられて

どこまでも広がる青い海のように、ハワイの音楽の魅力も果てしない。ハワイには美しい海、波、山々などの大自然がある。特有の歴史と文化がある。それらをベースにしたゆったりとした音楽がある。

text：藤崎真一

ここに雑誌「POPEYE」の 1975 年頃のスクラップがある。片岡義男さんが『アメリカノロジー』という連載の中で５ページに渡ってハワイアン・ミュージックを紹介している。デビューしたばかりのセシリオ＆カポノを中心に、カラパナ、カントリー・コンフォート、オロマナ、ビーマー・ブラザーズと続く。これらの音楽は、ハワイの気分を歌うとされた〈ダカイン・サウンド〉と呼ばれ、当時のサーフィン・ブームに乗って特に湘南や関西で話題になった。特に 76 年のセシリオ＆カポノの『ナイト・ミュージック』は思い入れのある方多いはずだ。トム・スコットら西海岸の腕利きが適度な洗練を加えてできあがった新しいハワイアンだった。日本では、この１枚がハワイアン・デビューだったという人は数限りない。そしてここがある意味スタートだったような気がする。

その後 94 年に『カワイプナヘレ』でデビューしたケアリィ・レイシェルの存在は今のハワイアンを語る上で欠かせない。クム･フラ（フラ指導者）だった彼の生徒が､クッキーを売って集めた資金で録音されたデビュー盤は、多くのハワイ好きが一発で気に入る、まさに楽園いや天国から降りてきたような音楽だった。深く甘みのある声でハワイでしか生まれ得ないゆったりとしたメロディを幾重にも丁寧に重ねられたアコースティック・ギターをバックに歌う。まさに楽園のイメージそのまま。現在のフラ・ブーム、ハワイ・ブームはこの一枚からはじまったと言えるし、彼の音楽でフラを踊ってみたいと入門する女性は今も多いというのもうなずける。とにかく、アップの曲もスローな曲もフラが似合う。これを前後してリリースされたナ・レオ、エイミー・ハナイアリィ、シスター・ロビ、そして今ダンサーがもっとも踊りたいアーチストとして人気のナー・パラパライやライアテアらが今のハワイアンの中心であり、これらはコンテンポラリー・ハワイアンとも呼ばれている。

フラと対極にある音楽もある。ハワイの若者にはフラよりこっちが断然人気がある。日本ではジャワイアンとも呼ばれ、ここ数年日本でもやっと人気が出てきた。ハワイ産レゲエのことで、アイランド・レゲエとかハワイアン・レゲエなどと呼ばれることが多い。ＦＭ局でのオンエアの中心はこのタイプで、タクシーなんかも必ずこれがかかっている。

ジャズをやる人もたくさんいて、中でもオータ・サンはジミヘンのようにいろいろな奏法を生み出した今も現役の〈ウクレレの神様〉 とも呼ばれるウクレレ・ジャズ・ミュージシャン。彼のジェントルな演奏はハワイの大人の社交場を連想させる。

ノース・ショアで生まれ育ったサーファーでありサーフィン映画の監督でもあるジャック・ジョンソンの音楽もユニーク。あの独特なメロウ感は、激しく危険を伴うサーフ・セッションのあとの仲間とのビアタイムがなければ生まれなかったはずだ。

古代ハワイには文字がなかったことから、人は文字のかわりに生活に関わるすべての事柄を音楽と踊りで伝承してきた。これがハワイの音楽とフラの始まりだ。ハワイは諸外国からの文化を受け入れながら、時にはフラや音楽を禁止されたり、最後はアメリカの一部になったりという事実を背負いながら、自分達のアイデンティティーを復権させてきた歴史がある。だからハワイの音楽はフラとセットになったトラディショナルなものもあれば、レゲエ、ジャズ、ブルース、ヒップホップなど多くのジャンルが演奏される。ハワイアンと一言で言うけれどハワイで生まれてハワイの人が演奏すれば、それはすべてがハワイアンということ。でも共通して言えるのは、どの曲にも遥か昔から、海や山々を吹き抜けてきた少しだけ湿り気のある〈風〉のようなものが感じられること。これに身をまかせた時のなんとも心地よく、リラックスした穏やかな気分。何度行っても、そのたびに憧れてしまう〈楽園ハワイ〉の音楽を聴いてしまうのはこの気分を味わいたいからなんでしょう。

藤崎真一（Shinichi Fujisaki）
1980 年代にタワーレコード入社。現在は店長＆ハワイアン・バイヤーとして横浜みなとみらい店勤務。『素敵なフラスタイル』本誌及びウェブ版、『AlohaSteet Japan』ウェブ版にハワイ音楽記事を掲載中。著書に『Aoha! ハワイアン CD132 選』（イカロス出版）そして山内雄喜氏との共著に『lohe lohe ハワイの音楽本』（デザイン・オフィースＫ）がある。

さまざまなところから聴こえてくる 楽園ハワイの音楽

CECILIO & KAPONO / NIGHT MUSIC
[SBME SPECIAL MKTS. SBMK-7248972]
これをハワイ産 AOR として聴く人も多い。ニック・デカロもストリングスで参加。

KEALI' I REICHEL/ KAWAIPUNAHELE
[ビクター　VICP-60371]
クム・フラである彼のアイデンティティーはこのカヒコの衣装にも。博物館の学芸員の資格を持つ。

ALOHA' N IRIE ～ HAWAII TAKE ME PARADISE ～
[ビクター　VICP-65050]
アイアンド・レゲエならこのシリーズ。ハワイから帰ってきたばかりの人はこれで体温維持。

OHTA-SAN / HAWAIIAN SUITE
[ビクター　VICG-60524]
冷たい飲み物片手に夕暮をぼんやりと待つ時間、ラウンジにはこんなウクレレとピアノのジャズが合います。

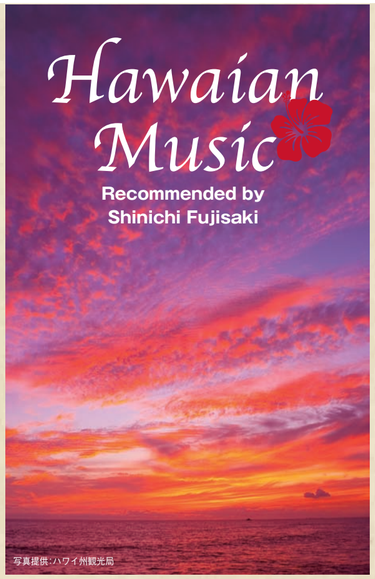
JACK JOHNSON & FRIENDS / BEST OF KOKUA FESTIVAL
[ユニバーサル　UICU-1220]
ジャクソン・ブラウン、ウィリー・ネルソン、ジェイク・シマブクロらとの競演を収めた実況盤。

写真提供：ハワイ州観光局

ロミロミ 120 分コースより 癒される楽園サウンドコンピ

LOVE ALOHA ～ SUN LITE & MOON LITE ～
[ビクター　VICP-65048]2CD
ディスク１にはアクティブに過ごす朝から日中のイメージのアップテンポの曲を、ディスク２にはサンセットタイムから月が輝く夜のイメージのゆったりした曲を収めたありそうでなかった、シチュエーション＆テンポ別２枚組。曲はケアリィ・レイシェル、ナレオ、ライアテアなど今ハワイでもっとも人気のアーチストだけで構成された豪華絢爛、まさに究極のハワイアン・コンピ。

ALOHA HEAVEN ～ HOALOHA
[ビクター　VICP-65061]
今年で 11 年目を迎えた大ヒットコンピ。ケアリィ・レイシェルなど人気者に加え、出たばかりのアーチストのヒット曲もすぐさま入れ込むことから毎年揃える愛好者が多い。



写真提供：ハワイ州観光局

映画で楽しむ、素顔のハワイアンの魅力いろいろ

ワンヴォイス ハワイの心を歌にのせて
[キングレコード　KIBF-960]
カメハメハ・スクールと言えば、直系ハワイアンのみが入学を許されるオアフの名門。有名なのが毎年開催される合唱コンテストで、ハワイ中に TV 放映される本格的なもの。本作はこのコンテストのドキュメントだが、練習のプロセスで起きるリーダーのプレッシャーは相当なもので、カメラはすべてを映し出す。本番の生徒の衣装やレイもハワイ好きには興味津々の部分も。優勝はなんと日本人作曲のあの曲。

©2009 Tiny Goat Ltd.

マイティ・ウクレレ
[グラッシィ / ポニーキャニオン　PCBE-54105]
もう一本『マイティ・ウクレレ』もすごい。こちらはハワイを飛び出して世界中に広がるウクレレ・クレイジーのクレージーぶりを追った映画。ウクレレでバンクやる人、ラップやる人、ウクレレでオーケストラやる高校生、半端じゃないウクレレ・コレクターなどなど。これ観た人、きっとウクレレ欲しくなりますよ。

少し懐かしさも漂う、正統派ハワイアンが聴きたければ

BEAUTIFUL HAWAIIAN ～ relax with Hawaiian standard songs
[キングレコード　KICP-1616]

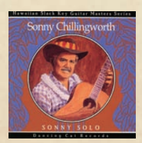
HAWAIIAN BREEZE ～ relax with Hawaiian standard songs
[キングレコード　KICP-1539]
フラダンサーに踊られ、ウクレレ弾きに愛されてきたハワイの宝もののような名曲 25 曲を厳選。低音の魅力と呼ばれるクイボ・クムカヒのふくよかなボーカルを中心とした地元で人気の歌手が、スティール・ギターも存分に入った演奏をバックに歌い上げる。ハワイで見たプールサイドのディナーショーでの演奏、まさにそんな生の雰囲気が魅力。いい具合に力の抜けた演奏に、なんとも幸せな気持ちになります。同シリーズで『ハワイアン・プリーズ』があり、こちらも〈アカカ･フォールズ〉〈アロハ･オエ〉など名曲揃いでおすすめ。

ハワイと沖縄の深いところを突くリスペクト・レコードにリスペクト！

リスペクトレコードがこの夏、83 歳伝説のピアニスト、レネ・パウロの久しぶりの新録をリリースする。ジェノア・ケアヴェの長男ゲイリー・アイコ、レイ・カーネの奥さんイローディア・カーネ、ギャビーの息子シリル・パヒヌイ、マリーン・サイなどにリジェンド達を一同にスタジオに集まってもらい、１曲づつ愛用のボールド・ウィンで伴奏をつけたデュエット名曲集。ハワイの厳しい時代､華やかな時代､そして今。すべてをのり越えた、優しいアロハが漂います。廃盤だったスラック・キー・ギターの名作２枚も復刻。レイ・カーネの『プナヘレ』、どこか切なくて、ハワイの雨を連想させる切ない演奏が彼の特徴。もう１枚はサニー･チリングワースの『サニー・ソロ』、バニオロ・スタイルと呼ばれる元気な早弾きも得意なサニーだが、ここではゆったりと弾き、時にきれいな声も聴かせる。ゆるやかな演奏の中にもリズムカルなテンポのある演奏は海までの細い未舗装の道をゆっくり自転車で漕いでいるくらいのテンポ。心地いいです。

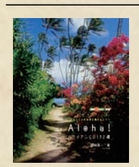
デュエット レネ・パウロ
[RESPECT RECORD RES-213] 7/18 発売

プナヘレ～ハワイ、優しき大地のギター～ レイ・カーネ
[RESPECT RECORD RES-203]



サニー・ソロ～美しきハワイアン・ギターの調べ～ サニー・チリングワース
[RESPECT RECORD RES-204]

ハワイアン・ガイドブック２冊



ALOHA! ハワイアン CD 132 選
[藤崎真一・著　イカロス出版]
筆者が 2005 年に出したハワイアン･ガイド･ブックです。ハワイのＣＤはインディーが多いので紹介したＣＤには廃盤も多いが、それを差し引いていただければ、ハワイアンの全体像や楽しさは十分に伝わる内容だと思います。表紙のフォトは切ないハワイを撮ったら世界一、野寺治孝氏によるもの。

ハワイアン・ミュージック～シンコー・ディスク・ガイド・シリーズ～
[山内雄喜・著　シンコー・ミュージック]
スラック・キー・ギタリスト山内雄喜さんの総合ハワイアン・ガイド・ブックです。演奏のスタイル別に整理しながら 500 枚に及ぶ作品を網羅。山内さんが会ったことある人も多く、そのエピソードなども一緒に紹介されていて楽しい。

ギャビー・パヒヌイのギターを聴き直してみるのもいい

ファミリー・ツリー O.S.T.
[SONY MUSIC INTERNATIONAL (SMIJ) SICP-3443]
ハワイ在住の女性作家カウイ・ハート・ヘミングスの原作を、ジョージ・クルーニーが熱演。ハワイで暮らす一家の痛くて悲しい、でもちょっと笑えるヒューマン・ドラマ。サウンドトラックの大部分はギャビー・パヒヌイのスラック・キー・ギターの響き。その他もケオラ･ビーマー､ジェフ・ピーターソンなど静かなギター系とレナ・マチャドなどレジェンド系の歌が少し。怒りに燃えて奥さんの浮気相手に乗り込むときも、喪失感に満ちた虚無な心で乗り込む車中でも、流れるのはギャビーのギター。想像していたよりもずっとずっとギターの音が場面にマッチして、淡々と進む物語にこちらも淡々とのめり込んでいく。もう何百回も聴いたギャビーを聴きなおすきっかけにもなりました。

フラとそのほかのハワイの趣味を紹介する専門誌

素敵なフラスタイル
イカロス出版
『素敵なフラスタイル』は私が 2002 年の創刊以来音楽頁を担当するフラとハワイアン・カルチャーの総合季刊誌。初心者からマニアまで幅広く満足できる内容が人気の秘密。フラの人気の曲をその場所まで行ってイメージを伝えたりという丁寧な取材も売りだ。リボンレイ、ステンシルなど、その道の第一人者の監修とともに入門者にもわかりやすく紹介している。それぞれのムック本も多く出版されていて、特に５月に出版されたばかりの『はじめてのフラ』はフラのすべてが、わかりやすく解説されておりお薦めの１冊。また『日本で買える花でつくるハワイアン・レイ』は多くのフラダンサーが待ちに待った１冊。

イカロス MOOK 『はじめてのフラ最新版』
素敵なフラ・スタイル編集部・編

イカロス MOOK『日本で買える花で作るハワイアンレイ』
亀田しのぶ・著

COLUMN

映画『ファミリー・ツリー』×映画『プリンセス・カイウラニ』

美しすぎる〜〈地上の楽園〉が背負う哀しい歴史と、家族の物語に涙。

text : 東端哲也

実はまだハワイには行ったことがない。だけど今、眼を閉じると浮かんでくるのはあの紺碧の海、降りそそぐ太陽の光。ブーゲンビリアが鮮やかな色で咲き乱れ、大自然とスタイリッシュなリゾート都市とが共存する姿。時を超えて受け継がれる豊かな歴史や文化。そして人々の笑顔にあふれるアロハ・スピリットと、健康的で眩しい小麦色の肉体…と、とめどなく沸き上がってくる麗しいイメージの数々。なぜだろう？ 確かに昨年からハワイを舞台にした犯罪捜査ドラマ『HAWAII FIVE-0』（※ 70 年代の人気作品のリメイク）にハマり、スリリングなストーリー展開と美しい風景、主役であるスティーヴ＆ダノの男前っぷりに熱をあげていたかも…。だが最近〈ハワイ LOVE〉な感情が一気に高まったのは恐らく、アレクサンダー・ペイン監督の『ファミリー・ツリー』を観たからだと思う。「どうせ、ジョージ・クルーニーがちょいダメな父親をコミカルに演じた、家族の再生物語でしょ」ぐらいに思っていた先入観は見事に打ち砕かれ、現代ハワイに生きる、ある一族の祖先から子孫への繋がりや深いファミリーの絆を描いた、壮大な〈裏〉テーマにすっかり魅了されてしまった。

映画の中でクルーニー演じる主人公は、1810 年にハワイ全島の統一を成し遂げた偉大な〈カメハメハ大王〉最後の直系の血をひくという設定になっていたが、一見、ただのリッチな白人弁護士にしか見えない彼が、そんな深い歴史を背負ってあの地で暮らしていることに凄くロマンを感じたのだった。同時に「そもそもハワイっていつから合衆国の領土になったのだろうか？」という興味が自然と湧いた。そんな時、絶好のタイミングで出会ったのが、ハワイ王朝最後の王女の生涯にインスパイアされた映画『プリンセス・カイウラニ』。カイウラニは 1875 年、時のカラカウア王の妹とスコットランド人との間に生まれた。国民に愛されて育った彼女だが、13 歳の時に英国に留学し、98 年までハワイを離れた生活を余儀なくされる。当時は、裕福な米国系移民がハワイの利権をねらって王制を脅かし、王に白人のみに選挙権を与える新憲法を無理やり突きつけたりしていた時代。やがて王が病死し、後を継いだ叔母のリリウオカラニ女王も 1895 年、クーデターを企てたかどで宮殿に幽閉され、王位を放棄させられてしまう。カイウラニが帰国したのは、暫定政府によってハワイ共和国が成立した後。映画では英国で実を結んだ愛を捨て、気丈に米国政府からの要人をもてなし、気品あるふるまいで、ハワイ人の選挙権を求めて闘う姿が、物語のクライマックスとして描かれている。実は彼女にはかつて、親日派のカラカウア王の計らいで、皇室との婚約話もあったという。もし実現していたら、日本とハワイを取り巻く現状はどう変わっていただろうか。王女は結局、ハワイが米国に併合された翌年 1899 年に病死している。あの〈地上の楽園〉にそんな哀しい歴史があったとは…ますますハワイが愛しく思えてきたかも。

© 2011 Twentieth Century Fox　映画「ファミリー・ツリー」

©Sputnik Oy　映画「プリンセス・カイウラニ」

映画『ファミリー・ツリー』
父子の絆とハワイアンの誇り

カメハメハ大王の血を引く、ジョージ・クルーニー演じる主人公は、カウアイ島に先祖から受け継いだ広大な原野を所有。だが、永久拘束を禁止する法律に従って、売却を考えていた。売れば一族皆に莫大な富が入るが、大自然が損なわれると反対する親族もいるし、島の人々も気にかけていた。ハワイを舞台に人生最大の危機を迎えた男とその家族を描き、全世界に共感を呼んでいる。

© 2011 Twentieth Century Fox

CD
『ファミリー・ツリー』O.S.T.
[Sony Music Japan International(SMJI)
SICP-3443]

MOVIE 映画『ファミリー・ツリー』
監督・脚本：アレクサンダー・ペイン　原作：カウイ・ハート・ヘミングス
出演：ジョージ・クルーニー／シャイリーン・ウッドリー／アマラ・ミラー／他
配給：20 世紀フォックス映画（2011年　アメリカ）
◎絶賛公開中！
http://movies.foxjapan.com/familytree/

映画『プリンセス・カイウラニ』
ハワイ王朝最後のプリンセスの真実の物語

ハワイ最後の王朝に国民から愛された若く美しい王女がいた――ヴィクトリア・カイウラニ。地上の楽園と呼ぶにふさわしいハワイ。世界中から集まった観光客が美しい風景や穏やかな気候を満喫するこの地をかつて治めてたのがハワイ王朝。ハワイの利権と土地が持つ可能性に目を付けたアメリカ人の策略で故郷を追われながらも愛する国家と国民の権利を求め、23歳で病に倒れるまで戦い続けた。アメリカ史に埋もれた悲劇のプリンセスの波乱に満ちた短い生涯の物語。

©Sputnik Oy

MOVIE 監督・製作・脚本：マーク・フォービー　音楽：スティーヴン・ウォーベック　出演：コリアンカ・キルヒャー／バリー・ペッパー／ウィル・バットン／ジョーン・エヴァンス／他
配給：アニー・プラネット（2010年　アメリカ）
©7/7（土）より、新宿武蔵野館他全国で順次ロードショー
http://www.princess-eiga.com/

劇場招待券5 組 10名様にプレゼント
●応募先はこちら
http://tower.jp/mag/intoxicate/

発行人＝嶺脇育夫
Publisher = Ikuo Minewaki
広告宣伝／メディア本部＝田中伸明
Advertising and Media Division = Shinmei Tanaka
メディア編集部＝西尾大作
Media Editorial Department =Daisaku Nishio
編集部＝佐々木透子、小林栄一、高見一樹
Editors = Toko Sasaki, Eiichi Kobayashi, Kazuki Takami
アートディレクション＆デザイン＝橋本直己（Hashimoto Design）
Art Direction & Design = Naoki Hashimoto
広告＝片岡裕希子　メディア営業部
Advertising Sales =Yukiko Kataoka
発行＝タワーレコード株式会社
広告宣伝／メディア本部 メディア編集部
intoxicate@tower.co.jp
〒 143-0006 東京都大田区平和島 4-1-23JS プログレビル 7F
印刷＝凸版印刷株式会社

©2012 by TOWER RECORDS JAPAN INC.
禁・無断転載　Printed in Japan

TOWER RECORDS

COLUMN

ハワイの大地の恵みを感じられる一点ものジュエリーで心から元気に

text : 小田綾子

Maxi

愛の象徴である薫り高いプルメリアの花、幸せを絶え間なく呼び寄せるスクロール（波）、永遠に 2 人を結びつける神聖なマイレの葉――ハワイの自然をモチーフにした絵柄が美しく刻印されているハワイアンジュエリーは、幸せを運ぶ予感を感じさせる。そもそもハワイアンジュエリーとはハワイアン エアルーム ジュエリーの略。エアムールとは〈代々受け継がれる〉〈家宝〉といった意味があるという。大切な人に、親から子にと〈特別な想い〉が込められ、代々受け継がれていくハワイアンジュエリー。子供が生まれたら買い足し、重ねづけすることもあるのだとか。そう聞くと、ハピネスばかりが詰まったようなハワイアンジュエリーだが、その誕生は愛する人の喪に服すためにつくられたものだったという美しくも切ない話は、意外と知られていないのではないだろうか。遡ること 1861 年、夫のアルバート公を亡くした英国のヴィクトリア女王が、漆黒のジェットでモーニング・ジュエリー（喪に服すためのジュエリー）をつくり、生涯それを身につけて過ごした。イギリス王室と交流の深かったハワイのリリウオカラニ女王は、ハワイで喪に服すために金のブレスレットに黒エナメルで〈Ho'omana'o Mau（オホマナオ マウ）〜永遠なる想い〜〉と刻んだモーニンジュエリーをつくる。これがハワイアンジュエリーのはじまりだといわれている。リリウオカラニ女王自らが作曲したあの名曲〈アロハ・オエ〉と刻んだブレスレットを恩師の校長に贈り、そのブレスレットが女子生徒の間で話題になったこともあったのだそう。

Maxi のハワイアンジュエリーは、リリウオカラニ女王がブレスレットに刻んだ言葉〈永遠なる想い〉をコンセプトに、一つひとつ職人たちの手によってつくられている。Maxi の創立者 / デザイナーのハワード・ミアオはハワイに育ち、ハワイの風や空気の中でハワイアンジュエリーに自然に魅せられていった。ハワイアンジュエリーの伝統を守りつつ、ファッション性の高い洗練されたデザインを貫いている。ごつくてカッコいいタイプのユニセックス系も得意だが、女性なら誰もがときめいてしまうようなフェミニンで繊細なデザインも大得意。進化し続ける Maxi が現在もっとも誇る技術は、ミリ単位に深く彫り込む職人の技。ホンモノならではの凄みのある逸品が揃うラインアップは、まさに〈一生モノ〉といえるだろう。細く華奢なラインの中にもしっかりと、そして美しく絵柄が彫刻されている。先に紹介したプルメリアの花、スクロール、マイレの葉といった代表的な 3 つの絵柄がすべて盛り込まれた〈いいとこ取り〉のオールドイングリッシュと呼ばれる彫り柄は、Maxi の作品の中でも特に人気が高いおすすめアイテム。

絵柄に込められた願いを大切に、心をこめられて誕生するスピリチュアルなジュエリーたち。ハワイの自然の中で、今日も特別な誰かのために、世界にひとつだけのジュエリーが生まれている。

オリジナルコードブレスレットを、それぞれ３名様にプレゼント！
赤のコード（ハート）　緑のコード（スカル）　モチーフ素材：シルバー925　サイズ：約17.5ｃｍ
●応募先はこちら http://tower.jp/mag/intoxicate/

特別展示

ハワイに生きる日系人
～受け継がれる日本の心～

同時上映「100年の鼓動～ハワイに渡った福島太鼓～」

会場：JICA横浜 海外移住資料館 [企画展示室]

会期：2012年7月27日(金)～ 9月2日(日)

休 館 日：月曜日（祝日の場合は翌日）

開館時間：10時～18時[入館は17時30分まで]

100年の鼓動 上映スケジュール：

1回目：14:00～/2回目：16:00～ ※期間中開館日毎日上映（上映時間：57分）

入場無料

主催：JICA横浜 海外移住資料館

〒231-0001神奈川県横浜市中区新港 2-3-1 Tel：045-663-3257 Fax：045-211-1781
HP: http://www.jomm.jp/　E-mail: info@jomm.jp